

コンプレックス・ラヴァー

目次

コンプレックス・ラヴァー 5

ファースト・インプレッション 271

コンプレックス・ラヴァー

プロローグ

社内恋愛絶対禁止。

そう言うのと大抵の知り合いは、物珍しい顔つきになって、詳細を根掘り葉掘り聞こうとする。確かに暗黙のルールとして存在する会社はあっても、きちんと社則として明記されている会社は珍しいだろう。

しかも、違反者は減給、または謹慎。同じ部署だとしたら、片方もしくは両方が左遷されるといふ徹底振り。

だからこそ新人研修中に初めて聞いた同期、特に女子の動揺と憤懣はすごかった。

過去に何か問題でもあったの？ と勘繰っても、社内の風紀や秩序を乱すからとしか書かれてないし、そんな噂も聞いた事はない。

世間では大手と呼ばれる通信会社で、他の会社より四十代、五十代の社員の割合が高いけど、部署によってはわりと若くて独身の人もいる。

グループ研修であちこちの部署を回っている間に、かつこいい先輩を見つけた新入社員だっているだろう。恋愛が活動力の源だという人達にとっては、まさに寝耳に水。

とは言っても、不況の中、新入社員の大半が苦勞してようやく掴み取った就職口だ。どれだけ不満に思っても、それを上司の前で口にするような猛者はいない。

それに、とある事情から男の人が苦手な私——倉木紗奈にとって、『社内恋愛禁止令』は他人事だつた。

けれど——

1

「君島部長を落とす？」

誰が。

私は言われたことが理解出来ず、聞こえたままを反復してしまった。

ちよつと薄暗いけど雰囲気のある居酒屋の一角。入社前研修も含めて約三ヶ月に及んだ、この研修最終日に、打ち上げという名目で同期の女の子が二十人近く集まっていた。

同期の中でも特に仲の良い子は、季節外れの風邪でダウン。グループ研修で一緒だった子も、残念ながら皆予定があつて欠席だった。そんな飲み会の居心地が良いわけもない。

元々、引つ込み思案な性格なので、そこまで仲良くない人ばかりの飲み会はかなり気後れする。

正直、普段なら断つたけど、終業間近に不意に予定を聞かれてうっかりないって言っちゃって、後

の祭り。それに、まさか同じグループの子が誰もいないなんて思わなかったんだよね。

早く終わらないかなあ、なんて幹事さんが聞いたら気を悪くしそうな事を思いながら、私はテーブルの端っこで、一人料理をつついていた。

とっさに断れなかった自分の要領の悪さを振り返って何度目かの溜息をついていたら、不意に斜め前に座っていた今日の幹事さんに「社内恋愛禁止令ってどう思う？」と、聞かれた。興味ないとはさすがに言えないから、「残念だよね」とお決まりの文句で答えた。

そう。いつも通り答えただけだったのに、いつもと違う反応が返ってきたのだ。

その子はお酒が入って潤んだ大きな瞳を私に向けて、「そうよね！」と、力強く頷き、

「だから君島部長を落としてきて！」

と、他のテーブルのお客さんにまで注目されるほど大きな声で、そう言い放った。

そして冒頭に戻る、と。

何故君島部長を落とすのか、そして誰が君島部長を落とすのかという疑問も顔に出ていたのだろう。真正面に座っていた同期の指先がぴつと私を指す。視線を上げると、妙に愛想の良い笑顔。

ものすごく嫌な予感がした。

「えっと……私？」

小さな指先に押されるように、私は背もたれいっぱいまで身体を引いて尋ねてみた。すると、幹事さんがその子を押しのけ、ぐっと身体を前に出して話し出す。

「あのね、『あの』君島部長が倉木さんを見て、人事部長に好きなタイプだって言ったらしいの！」

「え……ええ!?」

ありえなさすぎる話に、私は一瞬固まってしまう。でも、すぐにこれは勘違いされているのだと思ひ、苦笑した。

「えっと、それって藍ちゃんの方じゃないかな？」

確信しつつそう尋ねてみる。藍ちゃんというのは同期の中で私が一番仲が良い女の子だ。研修グループも同じだったので、大体いつも一緒にいた。だからきつと、長身でスタイルも良く、その上美人な彼女を指して言った事を、間違えて受け止めたに違いない。

私が好きなタイプ？ いやいや絶対ない。チビだし別に美人でもないし、そもそも男の人とマトモに目も合わせられないのだ。おとなしいを通り越して暗そうって、面と向かって言われた事だけあるのに。

「一ノ瀬さん？ 違う違う、倉木さんだよ。君島部長って、小柄で控え目な可愛い子が好きなんだって」

美人の藍ちゃんではなく私って言われて、喜ぶよりも怪しんでしまう。確かに小さいけど決して可愛くなんてないし。しかも今の口振りじゃ直接どこかで見られてるんだと思うけど、君島部長らしき人と顔を合わせた記憶は全くない。

「君島部長がそんな事言うのって意外じゃない？ これはチャンスだと思うの！」

「ごめん。よく分からない」

混乱する私に構わず、同期達は盛り上がり始める。何かを期待した目を向けられて、私は逃げる

ように視線を逸らした。

タイプ云々はとりあえず置いておいて、話の流れから彼女達が何を言いたいのかは分かる。もしかして私が飲み会に誘われたのは、これが目的だったりするんだろうか。そんな事を考えながらあえてとぼけてみせると、焦れたようにまた別の子が口を開いた。

『社内恋愛禁止令』を作った君島部長自身に会社内で好きな人が出来たら、禁止令が撤回されるんじゃないかって事ですよ。で、倉木さんは君島部長のタイプらしいから頑張つて口説いて落ちて来い、と。これでおっけー?」

最後の言葉は、野菜スティックと共に幹事さんに向けられたものだ。その言葉に幹事さんが満足気にうんうんと頷くのを見て、私は嫌な予感が当たってしまった事に目眩を感じた。

「じよ、冗談だよね?」

恐る恐る尋ねてみるけど、その子はもちろん、周囲の子の誰も肯定してくれない。それどころか「頑張つて!」と真面目な顔で応援された。

そんなの絶対無理だつて!

心の中でそう反論するものの、口に出す事はできなかった。周囲の期待に輝く目が痛い。

みんな他人事だと思つて面白がつてない? それに――

「君島部長つて、『あの』君島部長だよね?」

「他に誰がいるのよ?」

即座に向かいの席の女の子から突つ込みが入り、そうだよね、と溜息まじりに呟く。

さつきから連呼されている話題の主――法人営業部部長の君島隼人といえは、会社内では知らない人はいないほどの有名人だ。

うちの会社の花形部署である法人営業部を、二十九歳の若さで取りまとめているその優秀さに加え、彫りの深い整った顔立ちと、周囲よりもだんぜん高い長身。新入社員の間では研修開始当初からかっこいいと騒がれていた人物で、あまりそういう事に興味のない私ですら、名前は知っていた。けれど日が経つにつれ、彼の噂は外見や華々しい経歴ではなく、猛獣のようなキツイ性格が中心となつていった。勇敢な新人が彼にアプローチしたら、冷やかな沈黙の後、「お前は社則も読めないのか!」と怒鳴られ、目の前でメアドを書いたメモや手作りのお菓子をゴミ箱に捨てられた――なんていうのはまだ可愛いほう。他の断られ方は、話を聞いているだけで胃が痛くなるようなものばかりだった。彼の噂話が始まると、早々に右から左へと聞き流すのが習慣になるくらいだ。

「天は君島部長に二物も三物も与えたけど、一番肝心な性格をおさなりにしちゃったのよ」なんて言つたのは玉碎した同期の誰だったか。

まあそんな噂が飛び交い、研修一ヶ月後には、美形だけど近付いちゃいけない危険人物として定着した。というか、どうやら社内では元々そういう位置付けらしい。

そんな人に自分から近付きたいなんて思うわけもない。同時に私は営業には必須であるネットワーク系の資格を持ってないので、仕事で関わる事はないだろうと高を括つていた。だから、顔も知らないし知ろうともしなかったのだ。

それなのに、そんないろんな意味ですごい人を私が籠絡する?

女嫌いという噂もある君島部長。誰もが振り返るほどの美人ならともかく、私じゃどうあがいたって落ちないだろう。

「あの……でも、社則があるじゃない？ セツかく決まった就職先だしクビになったら困るよ」

『社内恋愛禁止令』を破った社員への処罰はとても重い。

この間君島部長にアプローチした子は新人だから、まだ会社のルールがよく分かっていないという事で、辛辣な言葉と態度だけで済ませてもらえたのだろう。

「大丈夫。倉木さんは近付いて好意を匂わせるだけで、『好き』とか具体的な事を言わなければいいのよ」

なんて無責任な！ って思ったものの、至ってみんな本気らしい。気が付けば同期全員の視線が私に向けられていて、ものすごいプレッシャーを感じる。

「だけど……君島部長と私なんて全然接点がないのに、近づく事も出来ないよ」

私は目の前で手を振りながらうつむく。どうしよう、本当に困る。そもそも恋愛禁止なんて社則まで作った人が、好みのタイプに迫られたくらいでそう簡単に撤回するわけがないのに。

私の精一杯の反論に、幹事さんは「それがね！」と、嬉しそうな声を上げた。私はそのテンションにちよつと驚いて、彼女のぼつちりメイクの顔を見つめる。

幹事さんはきちんと椅子に座り直し、こほん、とわざとらしく咳払いをしてから言い放った。

「倉木さんは法人営業部に配属されます！」

「え……ウソ!？」

頭の中で反芻してから、悲鳴混じりに聞き返す。私の希望は、あまり男の人がいない経理か総務だ。グループ研修前のアンケートにもそう書いた。気弱な性格だから営業なんて向いてないし、出来る気もしない。

「ホントよ。しかも君島部長の補佐役も兼ねた営業事務！」

次々と投げられる爆弾に、思考がフリーズする。

え、ちよつと本当に待って。営業事務？

「どうしてそんな事知ってるの!？」

「実はね、私、人事部に行った時に人事部長の机にあったファイル落としちゃってさ。慌てて拾ったら、その中に倉木さんの辞令があったんだよね。で、さっきも言った通り、『法人営業部』って書かれてたから、つい人事部長に聞いてちゃって世間話みたいになつてさ。そこでさっきの君島部長が、倉木さんの事気に入ってるっていう話をしてくれたのよ。ちなみに人事部長からの伝言。『若いパワーで君島君、籠絡しちゃってねっ』との事ですー」

「それ、本当？」

「うん、本当」

思ってもみなかった話に、自分が営業事務になるということの現実味が一気に増していく。

荒木人事部長は、この会社では珍しく女性の管理職で、グループ研修の時もちよこちゃん顔を出してくれていた。キャリアウーマンというよりは、そのふくよかな見た目も相まって、お母さんという感じのおしゃべりな女の人だった。

……どうしよう。だって営業部なんて、男の人が多いはず。

そう思っただけで粟立った肌をさすりながら唇を噛む。すると、隣にいた子がちょっとびっくりしたように顔を覗き込んできた。

「そういえば男の人苦手だって言ってたっけ？ 営業って男の人多そうだよね」
「うん……」

そう、私は男の人と接するのが大の苦手だ。それを理由に飲み会やら合コンやらは断っていた。交流のある同期にも、大袈裟にならない程度に伝えてある。

でも、それよりも——決定的に駄目なものが私にはあった。

だけど、あまりその事を突っ込まれたくないので、さり気なく話題を変える。

「人事部長って、その、『社内恋愛禁止令』に反対してるの？」

さっきの言い方じゃそんな感じに聞こえるし、一応社則があるのに上の立場の人が反対してるというのが意外だった。

「うん、そう。荒木人事部長、お見合いセティングするの好きらしいよ。なのにこの会社今は『社内恋愛禁止』じゃない？ 自分も社内恋愛の未婚したから、この味気ない会社の雰囲気を嘆いてるみたい。人事部長も何度も君島部長に撤回するように頼んでるらしいけど」

だから後ろ盾はぼつちりよ、と親指と人差し指で丸を作った後、幹事さんは少し声を抑えた。

「それに……ほら、倉木さんと同じグループだった田中さんの事もあるじゃない？」

「田中さん？」

田中さんは私と同じ研修グループの一人で、私よりちっちゃくて、えくぼが可愛い女の子だ。一緒の部署ならいいねーなんて話したのは、先週の金曜のお昼の事だったか。

彼女がどうかしたのかと首を傾げた途端、しんと静まり返るテーブル。幹事さんが驚いたように目を瞬かせていた。

「倉木さんとこ、今日遅番だったから知らなかったんじゃない？」

誰かがそう言うと、あーなるほど、と納得して頷く。そして内緒話をするように声のトーンを下げた。

「あのさ、倉木さんは知ってた？ 佐々岡君っていうちょっとゴツツイ子。実は田中さんと付き合ってたんだって」

「本当？ ううん、知らなかった」

女の子が集まると必ず最初に出るのが恋愛話だ。最初の飲み会で、田中さんは彼氏がいるとは言ってなかったから、フリーだと思っていた。

「うん、高校時代からの付き合いらしいけど、二人でいるところを常務に見られて、その事がバレちゃったみたい。佐々岡君、入社早々地方に回されるって噂よ。田中さんも彼も明後日まで自宅謹慎」

「え!? 本当に？」

自宅謹慎なんて驚くような処分まで出てきて、思わず聞き返す。

結構仲良くしてたから、彼氏がいる事言ってもらえなかったのはちょっと淋しいけど、『社内恋愛禁止令』がある以上仕方ないのかもしれない。ずっと隠してきたのがバレて——彼女は真面目

だからきつと、思い詰めてしまっているだろう。それに、配属先での評価にも影響するんじゃないのかな。就職したばかりで謹慎なんて、家族も心配するだろうし。すぐメールしなきゃって思ったけど、なんて送ったら良いか分からない。

でも、一緒に研修を頑張つて来たんだし――

「だからさ、お願い。田中さんのためにも、頑張つて君島部長を落としてほしいの」

何か自分出来る事はないか考えていたせいで、説得に入った幹事さんの言葉に素直に頷きそうになった。……そりゃ、田中さんのために何かしたいけど、でも、さすがにそれは。

「お願い、みんなのためにも頑張つて！」

「えっ、と」

「倉木さん！ 私も期待してる！」

「私も！ 気になる先輩がいるのよね」

畳み掛けるように他の子にも詰め寄られて、ごめん無理――と続けようとした言葉を呑み込んでしまった。

どうしよう。

落とすなんて、相手にされないから絶対無理だけど……機会があれば、頼んでみる事は出来るだろうか。本当に彼氏だけが地方に飛ばされたりなんかしたら、田中さんはとても辛いだろう。

さすがに明日の配属で地方っていうのはないだろうし、もし処分が決まるまでに君島部長に彼の優秀さとかを伝えられたら、少しくらい処分を軽くしてくれるかもしれない。

言葉を濁した私に、他の同期の子も両手を組んでお願いのポーズを向けてくる。

「……う、うん」

流されるように頷いてしまった私を見て、幹事さんの顔が輝く。そしてすつくと立ち上がると、テーブルに身を乗り出し、がしつと私の肩を掴み引き寄せてきた。

「よしっ！ 目指せ社内恋愛！ ハイスペック男子ゲット！」

「おーっ！」

肩を組んだままグラスを掲げて、そう宣言した幹事さんに、周囲もならってグラスを持ち上げる。期待に目を輝かせている子、ちよつと苦笑してる子と様々だ。だけどみんな面白そうな顔をしていて、たしなめてくれそうな子は誰一人いない。

にぎやかな乾杯の後は異様なハイテンションになり、私を置いてけぼりにして終電ギリギリの間まで盛り上がったのだった。

* * *

そして問題の配属日の朝。

胃が痛い……

昨日の夜からきりきり痛む胃を押さえ、もう何度目になるか分からない溜息をつく。

私の手には、先ほど渡されたばかりの辞令。

そこには代表取締役社長名と社印、そして『五月十五日付けをもって法人営業部勤務を命ずる』というシンプルな一文があった。昨日幹事さんが言っていた通りだ。

何度見たって記載された配属先が変わる事はなく、始業時間は着々と近付いてきている。

さつき会った同じグループの子に聞いたら、今年法人営業部に配属された新人は私一人だという。営業職希望の同期は、個人向け商品販売を主力とする営業部へ配属されたいらしい。通常は営業部や企画部を数年経験した後、大口となる法人営業部に回されるとの事。ちなみに、女性社員ばかりの営業事務はそのくくりには入らない。

同期からのお願いでだけでなく、新人が部署にただ一人というのも、胃を重くさせている原因の一つになっていた。

更衣室の壁にある銀色のシンプルな時計を見上げて、また溜息をつく。今日は辞令を受け取るために一時間早く出社した。始業時間まで更衣室や休憩室で時間を潰している同期は多いけど、みんなの目はそれぞれ大きな期待で輝いている。こんなどんよりとした気分の私が交じったら、楽しい会話を水を差してしまいそうだ。

「お疲れー、まだ見てるの？」

背中越しに聞き慣れた声が届いたのでそちらに顔を向けると、昨日は風邪で飲み会をパスした藍ちゃんがいた。まだちよつと辛そうだけど、配属初日だからさすがに休めなかつたんだろう。

藍ちゃんは二つ向こうのロッカーの鍵を開けると、返事を待つように改めて私に顔を向ける。

視線の先には、手にしたままの私の辞令。

「あ、うん」

「でも本当、意外な配属だったよね。紗奈ちゃんは簿記取ってるし、経理部長ともよく話してたから、絶対経理かと思ってた。でもまあ営業事務も一応請求書とか作るからね」

そうフォローしてくれた藍ちゃんは、希望していた企画部。…そっか、私がこんな顔してたら藍ちゃんが素直に喜べないよね。せめて今だけでもと、気持ちを切り替えて辞令を封筒に戻して鞆にしまう。

「藍ちゃんは風邪大丈夫？」

「うん。ちよつと喉が痛いくらいかな」

そう言うと、藍ちゃんは軽く咳をして、ロッカーに置いていた上着を羽織り手早く髪をまとめた。ダークグレーのパンツスーツに柔らかなシフォンのシャツをインして、カッコ可愛く着こなしている。いつもながらオシャレさんだ。細身のパンツが長い足を強調していて、思わず見惚れてしまう。今日も美人だなあ。見上げるくらいある藍ちゃんとの身長差も含めて、改めていいなと思う。二人でいると凸凹コンビなんて言われるくらい見た目も性格も正反対なんだけど、不思議と気が合っていて、何でも話せる仲になった。

鞆から出したファイルを整理する藍ちゃんを、ちらりと横目で見ると。

昨日の飲み会でみんなに頼まれた事を相談したいけど、病み上がりだし、今日は配属されたばかりだから自分の事で一杯だろうな。そう思うと、やっぱり言い出しにくい。

視線を手元に戻して溜息をつく。浮かない様子の私に気付いたのか、藍ちゃんはファイルをめく

る手を止めて私を見た。眉間にちよつとだけ皺しわが寄つた渋い顔。

「そういえば、営業つて男の人多いよね。紗奈ちゃん大丈夫なの？」

藍ちゃんにも最初の頃に男の人が苦手だつて事は軽く伝えてあるから、気にしてくれただろう。「あ、うん。さつき聞いたんだけど、営業の男の人は朝礼以外は外回りしてて、フロアにいない事が多いんだつて」

だから多分大丈夫と付け足すと、藍ちゃんはまだちよつと難しい顔をしつつ頷いた。

「まあ、営業部内でいろんな男の人と話して、苦手意識も薄まればいいね」

「そうだね」

もう決まつた事をごちゃごちゃ言つても仕方ない。

藍ちゃんの前向きな発言に乗つかつて頷く。うん、チャンスと言えばそうなのかもしれない。確かにこんな状況にでもならなきゃ、自分から男の人と話す機会なんてないだろうし。

「じゃあ、お先。気合入れてこ」

「うん、頑張ろう。あ、藍ちゃんこれ」

ポーチに入れていた飴を二つ、藍ちゃんに差し出す。「あ、これ好き」と嬉しそうに笑つた藍ちゃんに「お大事に」と返して手を振つた。見送つた背中中は真つ直ぐ伸びていて、自信に満ち溢れているように見える。なんだか元氣もらつちやつたな。私もあんな風になれたらいいんだけど……

願わくば、おじさんばかりの職場でありますように。

お父さんくらいの年齢の人なら、男の人でも気負わずしゃべる事が出来るのだ。

そんな事を願いながら、最後に大きな溜息をついて、ノートとメモ、筆記用具を会社指定のクリアバッグに入れて更衣室を出た。

法人営業部があるのは十一階。

独特の浮遊感の後、小さなベルの音と共にエレベーターの扉が開く。

エレベーターから降りて周りを見渡すと、同じような扉がたくさん並んでいた。どれが法人営業部の扉なんだろう。研修の時には行かなかつたフロアだから、よく分からない。

しばらくウロウロして、ようやく一番奥から二つ目の扉に法人営業部のプレートを見つけてほつとした。更衣室や研修室同様、入室するにはこのフロア専用のカードキーが必要だ。私はまだこのキーをもらっていないので、緊張しつつもその下の呼び出しボタンを押してみる。だけど、十秒経つても二十秒経つても返事がない。

ちよつと早すぎたかな。そう思つて腕時計を見ると、ちよつと始業の三十分前。

ここで待つていいのかと不安になつたその時。

「——だ。言い訳している暇があるなら、さっさと相手先に謝りに行って来い！」

エレベーター到着のベルの音と、ほぼ同時に聞こえた怒鳴り声。それは、まだ人のいない静かな廊下に反響する。

「ひゃっ」

ただでさえ緊張していたところに大きな怒鳴り声を聞いて、心臓が飛び出しそうになつた。悲鳴を上げてしまった口を慌てて押さえて、恐る恐る振り向く。見ると、社員らしき男の人が二人、ちよ

うビエレベーターから降りて来るところだった。

一人は離れた場所から見ても分かるくらい長身。きつくつり上がった意志の強そうな眉に切れ長の目。すつと通った鼻筋に厚い唇と、パーツは綺麗に整っている。だけど、不機嫌極まりない表情が全てを台無しにしていた。その後ろにいる男の人の顔はよく見えないけれど、恐らく怒鳴ったのは表情と雰囲気からしても、手前にいる人で間違いないだろう。

こ、こわ……

床までビリビリ震えるような怒鳴り声もだけど、その大きな身体から漂うたまたま険悪な雰囲気は何より怖い。

「失礼しますっ」

怒鳴られた人は上擦ってしまったのか、男の人にしては高い声を響かせる。

そして、その男の人が逃げるように非常階段の方へ駆け出すと、「十時までには報告しろ」と、厳しい声が飛んだ。

怒鳴った男の人は、そのままこっちに向かってくる。慌てて壁際に寄ろうとしたけれど、つり上がったその人と、ばっちり目が合って動けなくなってしまった。

「あ……」

鋭い視線が真っ直ぐに突き刺さり、冷たい汗が背中に流れてひやりとする。

私の馬鹿っ！　なんですぐに目を逸そらさなかつたんだろう……！

ああもう、配属早々ついてない。気を悪くした男の人に絡まれませんように、と祈りながらなん

とか視線を外して会釈せうかくした。だけど、何故か男の人はその場から動かない。

何だろう。やっぱり「何見てんだ」って怒鳴られるのかな。

そう思つて次に来るかもしれない怒声に備え、私はぎゅっと身体を縮こませた。

長い沈黙が落ちる。けれど、怒鳴り声どころか立ち去る足音すら聞こえない。耐えられなくなつて顔を上げると、男の人がちょうど動き出したところだった。相変わらず厳しい顔のまま、私を睨にらんでいる。

やっぱり怒ってる！

せめてこの怖い人が法人営業部じゃありませんように。そう願いながら、息を潜ひそめて通り過ぎるのを待つ。けれどその人は、私の目の前——法人営業部の扉の前で、びたりと足を止めた。

「おい」

低くて、太い声。

「はい！」

一瞬間まってしまったけど、自分が呼ばれているのだと気付いて、急いで返事する。

よく磨みがかれた大きな革靴に向けていた視線をそろりと上げる途中で、「来るのが早い」と地を這うような声がした。

「すみませんっ」

反射的に謝り、また視線を革靴に戻す。大きい、何センチくらいあるんだろうと思手が勝手に現実逃避を始める。すると、男の人が溜息をついたのが気配で分かつて、ますます顔を上げられなく

なった。初日早々同じ部署の人に呆れられてしまった。さつき頑張ろうと思ったばかりなのに、その決意がぐらぐらと揺れる。

「……っ」

不意に男の人の腕が上がったのが視界に入り、とつさに身構えた。同系色のラインが入ったスーツの腕が、私の耳のすぐ横を通り過ぎる。ピツという電子音がして振り返ると、カチツと解錠する音の後、男の人が扉を開いた。

「ほら」

……私、何してるんだろう。いくらなんでも殴られるわけがないのに。

過剰に反応してしまった事が恥ずかしくて気まずい。気付かれてないといいな、という淡い期待は男の人の不機嫌すぎる声音で打ち消された。

「とつと入れ。開けばなしだと警告音が鳴ってうるさいんだよ」

「すみませんっ」

先の中にいった男の人が片手で扉を押さえ、明らかに苛立った口調で促してくる。私は上擦った声で謝罪して中に入った。そこは、いかにもオフィスらしい雰囲気の一部屋。机の上には資料が多く積み重ねられ、雪崩を起こしそうな場所もあつて少し雑然としている。

怖い男の人はちよつと周囲を見渡してから奥を指す。その指の先を視線で追いかけると、衝立とソファらしき黒い革の一部分が見えた。

「指導役、もうすぐ来ると思うから、そっちのソファで待つてろ」

……指導役かあ……あれ？ この人、どうして私が法人営業部の新人だつて分かつたんだろう。制服じゃないから？ でも社外の人間って可能性もあつたわけだし。

不思議に思いながらも「分かりました」と返事をした。ここに入つて来た以上、この男の人が同じ部署である事は間違いない。つまり私の先輩にあたる。せめて名前を覚えておこうと思い、胸元で揺れていた社員証を見て、頭が真っ白になった。

『法人営業部部长 君島隼人』

——この人が。

告白してきた新入社員をこつぴどく振り、仕事にも厳しいという、『社内恋愛禁止令』を作った人？ そろりと男の人を窺うと、かちつと目が合い、「なんだ」と面倒臭そうな声音で尋ねられた。

私は「何でもないです」と泣きそうな声で呟いて首を横に振る。

もう嫌だ、この人怖い。

田中さんの事をお願いできればと思つていたけど、今は百パーセント駄目だ。まともに会話出来る気がしないし、何よりおどおどした自分の態度が相手を苛立たせてるのが分かる。

せめてもう少しタイミングを見計らつて……そうだ、初対面でいきなり頼み事なんて失礼だし、もう少し慣れてからの方がいいよね？

「あ、ありがとうございますっ」

田中さん、ごめん。

心の中で謝つて、案内してもらつたお礼の言葉と共に頭を下げる。怖い男の人——いや君島部長

はとつくに背中を向けていて、ひらつと軽く手を振り、そのままフロアの奥に消えていった。さっきの疑問の答えにも気付いて、私は小さく溜息をつく。

そりゃ配属先の偉い人なんだから、新人の事を知って当たり前だよ。名前を聞かれなかった時点で、どうして気付けなかったんだらう。

ソファで待つ事数分。その間、パソコンのモーターの音と書類が何かをめくる音しか聞こえなくて、きりきりと心臓が絞られるような緊張感が高まっていく。時々感じる君島部長の鋭い視線も上乘せられて、呼吸することすら憚られるほどだった。

誰でもいいから早く来て欲しい。その願いが通じたのか、それからほどなくして朝の挨拶と共に営業マンらしき男の人がフロアに入ってきた。その後ろに数人続く。ちよつとずつフロアが賑わってくると、君島部長の視線が人影で遮られてほつとする。さらに五分ほど経つと、私の指導担当の女の人が来てくれた。

「ごめんね〜！ ちよつと寝坊しちゃつて！」

愛想の良い笑顔で「丸井です」と挨拶してくれて、ちよつとだけ肩の力が抜けた。

丸井さんはすぐく若く見えるのにお子さんもいて、営業補佐としては五年目だそうだ。辞めちゃう子も多いからこれでも一番長いのだと豪快に笑う彼女は、ちよつと藍ちゃんに似ていて親近感を覚えた。

まず、丸井さんは「あなたのカードキーね」と言つて、私に一枚のカードを手渡してくれた。

これがあれば法人営業部のフロアを自由に出入りする事ができる。このカードは、各部署ごとに

扉の脇に置いてあるカードボックスに保管されているとのこと。出社した時は、暗証番号を押してカードボックスからカードを取り出し、フロアに入る。就業時間外——お昼休みで外に出たり帰社したりする時は、その都度カードボックスに返さなくてはならない。

タイムカードも兼ねているので、スキャンした時点で時間が記録されるシステムになっているのだ。これは研修中に習っていたので、暗証番号を押してカードをスキャンし、首から下げているカードケースに入れる。

それから、丸井さんは部署の決まり事をひとつひとつ丁寧に教えてくれた。

「営業補佐って言つても直属の上司——誰の下につくかはまだ決まつてないのよ。慣れるまでは、営業補佐の補佐みたいな感じで動いてもらおうと思うの。あ、君島部長の補佐は営業事務全員で対応するわ。席は私の隣だけど、業務によつて使うパソコンが違うからあちこち移動することになると思う。あと、事務用品はね——」

てきぱきと教えてくれる丸井さんの言葉を忘れないように、メモを取る。

「給湯室はあっちね。倉木さんはお茶出しとかしたくない人？」

「え？ いえ、大丈夫です。でも、あんまり美味しく淹れられる自信はないんですけど」

「大丈夫、大丈夫。お客様には基本的に持つて帰れるように缶コーヒートかペットボトルのお茶を出してるの。でも社員はもつたいたないからティーバッグのお茶つて決まつてね。仕事の手を止めるのは面倒かもしれないけど、ここは新人の仕事だと諦めてよろしくね。ペットボトルでも、やっぱり若くて可愛い女の子が持つてきてくれる方が、お客さんも嬉しいと思うのよ」

丸井さんは最後にフオーローをしてから、ふと時計を見上げてちよつと考え込むように腕を組む。そして一歩引いて改めて私を見た。

「手持ち無沙汰なものなんだから、時間まで机とか適当に拭いとく？ まだ緊張してるみたいだし、身体動かす方がいいかもね」

「あ……じゃあそうさせてもらいます。ありがとうございます」

確かに就業前と言っても皆忙しく働いてる中、一人席でぼうつとしているのは辛い。

「給湯室に机用のふきんがあるから。分からない事があつたら聞いてね」

最後にそう言い添えて、丸井さんは自分の席に戻っていった。

気が付くとフロアにぼつぼつと人が増えてきていた。やっぱり久しぶりの新人が珍しいのか、何となく視線を感じる。

机を拭いていると声をかけてくれる人もいたけど、若い男の人が多く、身構えてしまつてうまく返せなかった。ああ、もう何やつてるんだろう。こんな時、他の子だつたら当たり障りない返事をして、仲良くなれちゃうんだろうなあ。私はどう答えたらいいか考えすぎて、結局黙つてしまう事が多いので嫌になる。

そんな感じで時間は過ぎて朝礼が始まり、君島部長に不機嫌そうな低い声で名前を呼ばれた。ちよつと及び腰になりながら前が出る。

「倉木紗奈です。一日も早く仕事に慣れるように頑張ります。ご迷惑をおかけする事もあると思います。よろしくお願いします」

我ながら面白味もない定型通りの挨拶。みんなに注目されてかすかに声が震えた。君島部長がひと呼吸置いて「久しぶりの新入りだから色々教えてやれ」と言い添えて、すぐに次の申し送りに移った。

大勢の視線が外れた事にほつとして、そそくさと丸井さんの隣に戻る。

良かった。失敗はしてないよね。私は人前に出る事が苦手だ。

一番気掛かりだった初日の挨拶を終えた事でちよつと気持ちに余裕が出て、改めてフロアを観察してみた。やっぱり男の人が多くて、制服を着ている正社員の女の人は指導役の丸井さんを含めてたつたの五人。みんなピンと背筋が伸びていて、部長の話に頷いたりメモを取ったりしていた。

想像していたよりあっさりと朝礼は終わり、手持ち無沙汰になる前にまた丸井さんが指示をくれた。午前中は自分の机の周囲を整え、丸井さんの補佐として簡単な書類の整理をしていた。

お昼はお弁当を持つて会社内の食堂に行つてみた。だけど、残念ながら藍ちゃんを含め、配属初日の感想を言い合えるような知り合いはいなかった。溜息をついて長い長方形のテーブルの端っこに座る。

今度から顔見知りがない時は、外で食べようかな。

テラス席の向こうに広がる雲一つない空を見て考える。大勢の中の一人ぼっちは寂しいけど、自分から誰かに声をかける事も出来ない。それなら一人で外で食べた方が気楽でいい。会社の近くには大きな公園があつて、研修中一人になりたい時は、そこでお弁当を食べていた。

近くの賑やかな笑い声につられるように顔を上げると、斜め前の丸いテーブルにひと際華やかな女性社員の集団がいた。みんな上品な私服や綺麗な色のスーツを着ているから、秘書課なのだと思う。同期で誰か秘書課に配属された子はいるのかなあ。吸い寄せられるようにそちらを見る。特に目立っていたのは、はつきりした目鼻立ちの華やかな美人だった。栗色の巻き毛をアップにしている、少しだけ残した後れ毛が白いうなじに掛かって色っぽい。綺麗に組まれている長い足を見ると、身長も高いのだろう。

モデルさんみたい。綺麗な人。

一瞬目が合った気がしたので何となく会釈してみたけど、ふいっと逸らされた。

ちよつとへこみそうになった自分を「仕方ないよ」と慰めつつ、視線をお弁当に戻してぼんやりと午前中を振り返る。

うん、丸井さんが良い人でラッキーだったな。

仕事の説明とかすぐ分かりやすいし、色々話しかけて緊張を解そうとしてくれる。

さっぱりしてるのに気遣いは細やかで、とにかく素敵な人だ。

他の営業補佐の女の人もちよつと話したけど、そんなにクセのある人はいない気がした。丸井さんが説明してくれたところによると、社内恋愛に発展するのを警戒して、独身男性が多い部署にはなるべく若い女性社員を入れないようにしているらしい。特に若い営業マンが多い法人営業部では、事務の女性はほとんど既婚者だ。年齢も上の人ばかりだから落ち着いていて、自分のペースが確立されているからか一人で休憩を取る人が多い。女性特有のグループ意識が苦手な私にとつて気が

が楽だ。

結局、法人営業部で良かったのかもと思っている自分は、案外調子が良いかもしれないけれど。

最悪な事に――噂以上に君島部長が怖かった。

他の営業マンとのやりとりを見ていて思うんだけど、とにかく言葉に遠慮がない。言ってる事は正論だし、上司なんだから厳しくて当然なんだろうけど。

私は今まで女子高、女子大だったので、あまり男の人と関わった事がないし、お父さんは感情の起伏が激しいタイプじゃないから怒鳴り声に慣れてない。男の人は普通に話していても怖いくらいなので、怒鳴り声なんて自分に向けられたものじゃなくなつてビクビクしてしまう。そんな自分のチキンっぷりが情けない。

しかも、君島部長は存在感がすごいから、一緒のフロアにいただけで緊張する。でも他の女性社員も営業マンも、気にする事なく自分の仕事をこなしていた。君島部長のその圧倒的な存在感も、毎日接していれば、私もいつか慣れるのだろうか。かなり時間がかかりそうだけど……

ただ、女性社員達がキヤーキヤー騒ぐ理由は分かった。君島部長は野性的な魅力溢れる精悍な顔立ちをしている。正直その辺の俳優さんよりかっこいいし、私には怖いばかりの低い声だつて、大多数の人は渋くて良いと言っている。

そんな彼から何故かずつと視線を向けられている。痛いくらいに。見られている事で緊張して手が震えるし、余計に失敗してしまいそう。忙しい職場だから、きつとこんな奴で大丈夫なのかつて

思われてるんだろうなあ。学生の頃はよく「何かトロそう」って言われたし。

「……こわい」

箸を口に入れたまま、気が付けばぼつりと声に出していた。

でもあつちは部長、こつちは新人だ。一緒に仕事する機会なんて滅多にないだろう。丸井さんも君島部長は忙しくて社内にいる方が珍しいって言っていた。そう、だからしばらくは面と向かって話す機会なんてない。なんて高を括くくってたんだけど――

少し早めにお昼休みを切り上げて、席に戻り書類整理を再開しようとする、隣に座っていた丸井さんが、ふとモニターから顔を上げた。

「書類整理は急ぎじゃないから、先に君島部長のお手伝いしてくれる？」

「え……あ、はい！」

一瞬間まって、慌てて返事をする。

ツイてない。なるべく近付きたくないなんて思っていたのがいけなかったのだろうか。せめて、今日はこれ以上関わらずにいたかったのに……

私の引き彎まった顔に、どうやら丸井さんは気付かなかつたらしい。「お昼行って来るわねー」と颯さつ爽そうと出て行った丸井さんの背中を、ちよつとだけ恨めしく見送る。そろりと君島部長のデスクに視線を向けると、彼は取引先らしい相手と電話をしていた。

よし、行くぞつ！

君島部長が電話を切って、落ち着いたタイミングを狙って声をかける。それだけの事なのに、ものすごく緊張した。お昼休み、下手に君島部長の事を考えない方が良かったかもしれない。

書類から顔を上げた君島部長は私を見て、ああ、と頷いた。

朝より機嫌は悪くないように見えて、ちよつとほつとする。

「名刺と書類の整理を頼む。ここじゃ狭いから、ミーティングルームの方に置いてある」

そう言つて斜め向こうの白い扉を指さす。それは三つあるうちの一番小さなミーティングルームだ。午前中に丸井さんに教えてもらっていた。

「書類は、去年のファイルと同じ順に並べて綴とじてくれるだけでいい。名刺は、住所や役職が前年度と変わっていたら、ファイリングした後ふせんに付箋をつけておいてくれ」

「分かりました」

気を付けてさえいればそれほど難しい仕事じゃないよね？

それに、思っていたよりも普通に君島部長と会話出来た。頭を下げてから、ミーティングルームに向かう。部屋の中に入ると、扉が分厚いせいか、賑やかな電話の音や人の話し声が少し遠くに聞こえる。十人は座れるくらいのテーブルに、段ボール一つとファイルが二冊置かれていた。

がらんとした空間に、ちよつと寂しいと思つたけど、誰の視線も気にせず一人でいられるのは楽だ。それと同時に、そんな内気……というか暗い自分が少し嫌になった。

いけない、いけない。仕事しなきゃね、うん。

気を取り直して、ファイルを手にとって中身を確認する。

最初に書類とか名刺とかを整理させるのは、お得意様を覚えさせるため、なんて就職情報誌に書いてあったなあ。そんな事を思いながら、前年度のファイルをチェックして、まずは日付順に並べるだけで良い単調な書類の分別作業に没頭した。

二時間ほど経った頃、不意に響いたノックの音。

返事をする、扉が開く音と共に「順調か」という声がかかった。

——君島部長だ。

一瞬名刺を手を持ったまま固まってしまう。

朝からよく聞いていたし、怖いくらい低い声だから顔を見なくてもすぐ分かる。てっきり丸井さんかと思っていたので、心の準備ができていなかった。私は慌てて頭を下げると、動揺を隠すためにファイルを手取る。

「あとどれくらいだ？」

「しょ、書類の方は終わりました。名刺もあと三十分くらいで終わります」

ああ、どもってしまった。

ぼんぼんと投げるような話し方は、慣れていないとキツク感じる。これがこの人のしゃべり方なんだっていうのは何となく分かるけど、今まで周囲にこういう人がいなかったから、何だか怒っているように思えて緊張してしまうのだ。熱心に整理している振りをしつつ、身体全体でアンテナを張って様子を窺う。

様子を見に来てくれたんだよね。私の仕事、時間かかりすぎてたかな？

ホワイトボードの上の時計を見ると、四時半。終業時間まではまだ一時間ある。

ふと、扉の向こうが静かな事に気付いて手を止めた。扉の隙間から見えたフロアに誰もいなくてぎよつとする。

私が視線をフロアに向けたままなのに気付いた君島部長は、説明してくれた。

「今日は得意先で携帯端末機の搬入とタブレットの説明会があつてな。手が空いてる奴はそつちに行ってもらってる」

「あ……そうなんですか」

搬入は力仕事だし、説明会も新人じゃあお手伝いすら出来ないだろう。

「終わった書類、先に戻しておくか」

私に向かつてというよりは、独り言のように小さく呟かれた言葉。覗き込むように近づく影に、私の身体がぎくりと強張る。

「あの、全部終わったら私運びます——」

冷静に冷静に、と自分に言い聞かせながら段ボールを手繰り寄せようとした手が途中で止まった。見上げた君島部長の顔には、黒のセルフレーム。ミーティングルームに入って来た時は顔を見ないようにしてたから気付かなかったけど、その整った顔には——

『眼鏡』があつた。

「……っ」

反射的に身体を引いてしまう。その拍子に腰にパイプ椅子が当たって、派手な音が響いた。

「どうかしたか」

君島部長の瞳が驚いたように私を捉えて見開かれる。

「つや、な、んでもないです……っ」

勢いよく顔を逸らして、慌てて首を振った。部長の後ろには固く閉じられた扉。狭い密室、二人きり。だいじようぶ、だいじようぶ。

だから、落ち着け、落ち着け、私。

きつく拳を握りしめ、自分に言い聞かせていると、不意に大きな手が私の肩に触れた。

「おい？ 何でもないって顔色じゃないだろ」

——伸ばされた大きな手。

逆光に反射する無機質な光。怯えた幼い自分の顔がレンズに映り込んで——

「つあ……近付かないで……っ!!」

ぱしっと乾いた音がミーティングルームに響く。私は君島部長の手を払いのけ、這うようにして部屋の隅に逃げた。耳のすぐ近くで鳴っているような心臓の音が耳障りで、忙しなく息を吐き出す。

押さえるように胸に手を置いて深呼吸し、ようやく落ち着いた。

——あ。

自分が今、何をしたのかを自覚して、吹き出していた汗が一瞬にして引いた。

心配してくれている人に近付かないで、なんて。

配属された初日で、手を払いのけた相手は直属の上司。

しかも、あの君島部長。

どうし、よう。

私の『事情』を話して謝っても、こんな面倒くさい新人なんか迷惑に思われる。せつかく営業部でもやっていけるかもしれないって前向きになれたところだったのに。

どうしたらいいのかわからないし、怒っているであろう君島部長の顔も見れない。だって、彼は眼鏡をかけているのだ。そう思うと、また恐怖が足元から這い上がってくるような気がして、視界が揺れた。

「す、すみません……あのっ私、眼鏡をかけてる男の人が苦手で」

怒鳴られる前に何か言わなきゃと思い、必死で言葉を紡ぐ。

言い訳じゃないけど、ここまでパニックになるのは本当に久しぶりだった。前もって眼鏡をかけていると知っていれば、極力見ない事でやり過ごせる。そう思っていたのに、こんな序盤から失敗するなんて。

額が机につくほど頭を下げると、君島部長の身体がかすかに揺れた気配がした。

「眼鏡？ ああ、これか」

ぎゅっと目を瞑つぶったまま、はい、と返事する。

声に怒りは感じられなかったけど、気を悪くしてしまっただろう。

そのままうつむいていると、「とりあえず外したぞ」と、君島部長の声が降ってきた。

恐る恐る顔を上げれば、眼鏡を外した——朝と同じ君島部長の顔。怒っているというよりは困惑しているみたいだ。こちらを窺うかがうような雰囲気は、きつと私との距離を測りかねているんだろう。きゅつと唇を噛み締めて、改めて頭を下げる。

「失礼な事してすみませんでした。あの、手は大丈夫ですか」

「いや、それは不用意に触れた俺が悪いから気にするな。で、眼鏡が苦手なんだよな？」

君島部長は、あごを撫でながら少しの間を置いてそう尋ねてきた。想像していたような敵しい口調じゃなくて少し拍子抜けしたけれど、「詳しく話してくれないか」という言葉にまた緊張が戻ってくる。

「……は？」

ああ、やっぱり。諦めに近い気持ちで、私はうなだれた。どうして入社試験の時に言わなかったんだって言われるかもしれない。当たり前だ。毎回こんな醜態しゆうたいを晒せば確実に業務に支障をきたしてしまうだろう。クビは免れないかもしれない。就職を喜んでくれた両親になんて言おう。こんな状態で次の就職先が見つかるだろうか——そんな事をぐるぐる考えていると、君島部長は私の顔を見て軽く眉を擡ひそめた。

「まだ顔色が悪い。座っとけ」

そう言って、あごで示されたのは一番近い椅子。

「あ、ありがとうございます」

問答無用で怒鳴られると思ったので、意外だった。

顔も態度も怖いけど、案外優しい人なのだろうか。怒っていい状況なのに、逆にこうやって気遣いを見せてくれる。でも、だからこそ余計に自分が情けなくなってしまう。

恐る恐る近くの席に座らせてもらう。君島部長も私から椅子三つ分離れた席について、机の上で軽く手を組み話を促うながすように私の方を見た。その表情は真剣そのものだ。

分かってもらえるだろうか。

今まであまり他人に話した事のない、私が眼鏡をかけた若い男の人が苦手な『事情』。

不安をぐつと胸の奥に押し込めて、私は覚悟を決めて口を開いた。

「……実は私、子供の頃、誘拐されそうになった事があって」

思いもよらない話だったのだろう、君島部長の表情が険げんしくなった事に気付いて、慌てて「未遂です」と付け足した。だけど、一向に眉間の皺しわは消えない。このまま話が続いていいものか迷っている、短い言葉で続きを催促された。

「あ、はい。えつと……近所に住んでいた幼馴染おきななじみの子が大声を上げたので、犯人は逃げていきまして。結果的には車に押し込まれそうになったっていうだけなんです。そんなに騒ぎになったわけでもないの……」

私はうつむいて、膝の上で組んだ自分の手を見つめる。緊張しすぎて自然と顔に熱が集まってくるのが分かり、赤くなってしまった顔を見られるのが恥ずかしくて余計に顔が上げられない。

「それ以来、若い男の人が苦手になってしまって。でも、年齢と共にだんだん拒否反応は出なくなってきたんですけど、どうしてもその誘拐犯と同じ眼鏡の人だけは苦手で……今も真つ直ぐ顔が見れません」

「近付かれると駄目って事か？　じゃあ、どれくらいの距離なら平気なんだ」

愛想の欠片かけらもない声なのに、今は何故か怖くない。淡々としているせいか、逆に不思議な落ち着きを与えてくれる。

「すれ違いうくらいなら、視線を逸そらしていれば大丈夫なんです。あと、事前に分かっていたら近くにいっても我慢出来ます。だけど不意に……さつきみたいに、こういう個室とかエレベーターで二人きりになってしまうと、途端に怖くなって」

このミーティングルームは結構狭い。もう少し広ければ耐えられたかもしれない。ふと、さっきの恐怖が蘇よみがえって言葉尻かすれた。膝の上でぎゅっと両手を握り込んでやり過ごす。

今はおしゃれとして眼鏡をかけてる人だっているし、普段コンタクトだけどプライベートは眼鏡という人も多い。学校でも外でも眼鏡の男性はいっぱいいるから、私はいつもうつむいてしまふ。そのせいで「感じ悪い」って言われる事も結構あった。

「男嫌おとこきらいってわけでもないんだな？」

「お父さんくらいの年代の人なら平気なんです。アイドルや俳優さんを見ればかっこいいなって普

通に思うので、多分違うと思います」

「でも苦手か？」

「そう確認されてちよつと考えてから頷うなづいた。

「そうです、ね」

「そうか」

学生時代はもちろん人並みに彼氏とか色々夢見ていた。けれど、いつもうつむいて感じが悪そうなる理由をいちいち周囲に説明するのも疲れ、若い男性全般を避けるようになってしまった。ある程度仲の良い子にも眼鏡うんめい云々関係なく単なる男嫌おとこきらいだと思われていたみたいだけど、それならそれでいいとあえて否定もしていない。

こんな風に、自分の事をちゃんと話すのはずいぶん久しぶりだった。だから、途中でどもったり、たどたどしくなってしまう。けれど、君島部長は時々相槌あいづちを打ちつつも、急せかす事なく最後まで聞いてくれた。

話し終えてそつと君島部長を窺うかがうと、腕を組んで深く考えるような姿勢で頷うなづいていた。何に對しての納得だったのか——私のパニックの原因に對してという感じではない。

「あの？」

「……いや、何でもない。眼鏡外してたら大丈夫なんだな？」

「大丈夫、です」

ちよつと声が震えたのは、まださっきの恐怖が残っていたからなのかもしれない。でもそれを聞

いて眉間に皺を寄せた君島部長は、胸ポケットを軽く叩いた。多分そこに眼鏡が入っているんだろう。「朝からモニターばかり見ていて目が疲れたから、さっき眼鏡にしたんだ。普段はコンタクトだから心配しなくてもいい」

「そうなんですか」

私はほっとして頷く。君島部長は腕時計を見下ろすと、長い足を解いてゆっくりと立ち上がった。「とりあえずもう定時も近いし、片付けるか」

「あ、大丈夫です！ 自分で……」

机の上には散乱した名刺。

さっき私が逃げた時に放り出してしまったのだ。足元にも何枚か落ちていたので、慌てて拾い上げる。

「いや、散らかしたの俺だからな。綺麗に並べてくれていたのに悪かった」

君島部長はそう言つて、同じように屈んで床に散らばった名刺を手早く拾い始めた。私はますます慌ててそれを止める。

「本当に大丈夫です！ お忙しいのに」

そう、君島部長は多忙なのだ。

丸井さんのお手伝いをしていた午前中も会議や来客を繰り返し、その合間にいくつも社内電話や携帯で指示を出して精力的に動いていた。

ミーティングルームに君島部長が来てから一時間、きつと無駄な時間を使わせてしまっただろう。

「あの、私がやりますので、お仕事に戻って下さい」

私の言い方が悪かったのか、君島部長の眉がぴくりと動いた。そのままつり上がって表情が一気に陰くなる。反射的に後ずさった私を見て、君島部長の眉間の皺がますます深くなった。

「すみませ……」

「いい。二人でやった方が速い」

謝罪を遮られきつぱりと強く言われると、それ以上言えない。

私は拾い集めた名刺を机に戻して、もう一度整理し直す。部長は前年度のファイルを見る事なく、まるでトランプをさばくようにてきぱきと分けていった。

二人きりだけど、今は眼鏡をかけてないからまだ大丈夫。でもどうしても気になって、眼鏡が入っている胸ポケットの辺りをちらちら見てしまう。

そして沈黙が続き気詰まりになった頃、私は思い切って聞いてみた。

「あの、私、クビでしょうか」

けれど、君島部長は思つてもない事を聞かれたという表情で、手を止めて私を見た。

「あ？ ……ああ、そうか。まあ、さすがに客の前でパニックになったら困るな」

私に向けた返事というよりは、独り言のような呟きをもらして、君島部長は口を閉ざす。

それから、短くも長くも感じられる沈黙が続いた。ぎゅっと身を縮めて次の言葉を待っていると、君島部長は私の顔を覗き込むように屈んで、にっと唇の端をつり上げた。意地悪な笑い方なのにどこことなく色っぽくて、一瞬金縛りにあつたみたいに身体が固まる。

「じゃあ、リハビリしてみるか？」

「リ、ハビリ？」

私は、何を言われているのか分からず、そのまま聞き返してしまつた。君島部長がとんと机の上で名刺を揃える音が響く。そして、ゆつくりと上げられた強い視線が私をしっかりと捉えた。

「そんなに構えなくてもいい。リハビリというか、レッスンだとも思え。それで、眼鏡がなかったらどこまで平気だ？」

どこまで平気って……

「え、あの」

「一般的なパーソナルスペースがこの辺だとして」

一歩、君島部長が距離を詰める。

足が長いせいか、歩幅が私と全然違う。手を伸ばせばすぐに届く距離。

君島部長も同じ事を思ったらしい。

「手を伸ばせば届く距離。これは？」

「え……っと」

何か返事をしなきゃいけない空気に押され、少し考えて頷く。

うん、眼鏡さえかけていなければ、まだ平気。

そうか、と返した君島部長は、また私との距離を一歩詰めた。身長が高いから威圧感があつて怖いには変わりないけれど、あの呼吸の仕方を忘れるような恐怖はない。私の身体がすつぽりと君

島部長の影に覆われる。

「肩が触れる距離」

大丈夫だけど、大丈夫じゃないような。でも、この距離は怖いというより、少し恥ずかしい気がする。トラウマを抜きにしても、普段なら君島部長は近寄りがたいタイプの男の人なのに。さっきのパニックでリミッターが外れたせいとか、頭のどこかが麻痺しているのかもしれない。

苦くて少し甘い匂いは煙草だろうか。

家族以外の男の人とこんなに近付いた事がないので、このうるさいくらいの鼓動が何のせいなのかよく分からない。

私が何も言わないので問題ないと判断したのか、君島部長がまた少し近付いてくる。それに対して、私は威圧感に押されるように後ろに下がった。とん、と背中当たった壁の冷たさに、心も身体もひやりとする。ゆつくりと上げられた君島部長の腕が、私の頭のすぐ横に置かれた。まるで追いつめられたような錯覚に陥る。

少し傾けた君島部長の顔がゆつくりと近付き、薄い唇だけが視界の端に映る。耳元で囁く吐息が頬をかすめた。

「——息も触れ合うほどの距離は？」

鼓膜をくすぐるような艶やかな声に驚く。今までの粗暴さが嘘のように甘い声に、くらりと目眩がした。

「……あ」

フリーズしていた頭が、ようやく今の状況を認識して、ぶわあつと一気に顔が熱くなる。恐らく真っ赤になっているであろう耳の近くで、くくつと喉の奥で笑う気配がした。

身体の横に無防備に下ろしたままだった私の手を下からすくい上げたのは、硬くて骨ばった太い指。その中指が滑るように動いて開かされた手のひらに、何か冷たくて固いものが当たった。

下を向いて確認すると、手に眼鏡が置かれている。

同時に圧迫感がなくなり、気が付けば君島部長は一步分の距離を置いた向こうにいた。

その一瞬の動きに、思わず私は目を瞬かせる。

「それやるよ。毎日見てりゃ平気になるかもしれないし。度が合わないから買い換えようと思ってたトコだ。ああ、今はもう一本スベアがあるから気にするな」

「いえ、あの」

君島部長の眼鏡をもらおう？

慌てて首を横に振るけれど、君島部長は何か思いついたように、にやつと笑ってあごで眼鏡を指した。

「案外、金槌で叩いて木っ端微塵にしたらすつきりするかもな？」

手の中のフレームの裏には、有名なブランドのロゴ。

いくらなのかは分からないけど、絶対高いはずだ。これを金槌で？

「む、無理です！」

今度はもげそうなほど勢いよく首を振った私を見て、君島部長は、ぷつと噴き出して笑い出した。

さっきの意地悪な感じとはまた違う険のない笑顔に、こんな顔も出来るのかと驚く。目尻が少し下がって、年齢よりもずっと若く見える。とっつきにくい印象が薄らいだ。

君島部長はひとしきり笑うと、処理済みの書類の段ボールを抱え上げた。私が慌てて持とうとすると一蹴された。

「今から会議だから少し出る。定時になったらカードだけ返して先に帰れよ」

そう言っただけで君島部長は、結構な重さの段ボールを抱えたまま器用に扉を開く。

「お疲れさん」

さっきの事を思い出したのか、君島部長はもう一度喉の奥で小さく笑うと、ミーティングルームを出ていった。

ボタン、と扉が閉まる音。

今の、なに。

少し遠くからまた扉が閉まる音がして、君島部長がフロアからも出ていったのだと分かった途端、身体の力が抜けた。ずるずるとその場にしゃがみ込み、君島部長の息がかかった耳を押さえる。まだ熱い。

さっきの一連の出来事が頭に浮かんできて、一気に顔に血液が集まる。

「え、えー……!?!」

こうして配属一日目は、『社内恋愛禁止令』も、田中さんの事も頭から綺麗に消えて、君島部長の意味深な行動について何時間も頭を悩ませる事となった。